慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	現代日本語における「原因」を表す格助詞「で」と「に」の交替と制約
Sub Title	Particules de "cause" DE et NI en japonais : alternance et contraintes
Author	芦野, 文武(Ashino, Fumitake) 伊藤, 達也(Itō, Tatsuya)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2021
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 人文科学 (The Hiyoshi review of the humanities). No.36 (2021.) ,p.17- 36
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20210630-0017

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

現代日本語における「原因」を表す格助詞「で」と「に」の交替と制約*

芦野文武／伊藤達也

1　導入

本稿は，現代日本語において，いわゆる「原因」を表すとされる格助詞「で」と「に」の交替および制約を扱う(1)。現代日本語の詳細な記述文法である日本記述文法研究会（編）（2009：79）（以下「日文研」と略記）は，「起因(2)」を「その事態が起きることによって，結果として述語で表される事態が引き起こされること」と定義し，「起因は主として「で」によって表される。(…)「に」「から」も起因を表すことがある」としている。そのうえで，「で」は，「変化の原因」や「感情・感覚の起因」などを表し(3)，「に」は「感情・感覚の起因」や「継続的状態の起因」を表すとし

* 本稿は，2020年度，慶應義塾大学・学事振興資金の補助を受けて行われた研究成果の一部である。

(1) 「原因」を表すとされる格助詞には，ほかにも「から」や，複合形式である「のために」，「のせいで」，「によって」，「につき」，「とあって」などもあるが今回は扱わない。芦野・伊藤（2020）では，原因を表す「で」と「から」の対比を短く分析している。

(2) 本稿では「原因」と「起因」を区別せず，「原因」という語を採用する。

(3) 日文研（2009）は，「行動の理由」（cf.「急用で家へ帰った」），「判断の根拠」（cf.「その人の職業は身なりで判断できた。」）も「原因」の用法に含めているが，本稿では扱わない。芦野・伊藤（2019）ではこれらの用法についても言及している。

ている。

（１）　強い風で看板が倒れた。（日文研2009：80）　　（「変化の原因」）
（２）　友人とのことで悩んでいる。（*ibid.*：81）（「感情・感覚の起因」）
（３）　職員の横柄な態度に腹を立てる。（*ibid.*：82）
（「感情・感覚の起因」）
（４）　潮風に帆が揺れていた。（*ibid.*：82）　　（「継続的状態の起因[4]」）

これらの例では，「感情・感覚の起因」の意味は「で」と「に」に共通しているように思われるが，次の例文が示しているように，述語がいわゆる感情動詞の場合に，自動的に両者が交替できるわけではなく，文脈によって容認度が異なることが観察される。

（５）　太郎はその素晴らしい光景｛？で／に｝感動した[5]。
（６）　太郎がそんな光景｛で／に｝感動するなんて…

また，「で」の意味とされる「変化の原因」は，「に」によっても表すことができる場合もあるし（cf.（７）），「に」の意味とされる「継続的状態の起因」も「で」で表すことが可能な場合も存在する（cf.（８））。

（７）　太郎が癌｛で／に｝倒れた。
（８）　旗が風｛で／に｝舞っていた。

ただし，助詞が標示する名詞句の性質によっては，いつでも交替が可能な

⑷「継続的状態」とは，「述語が継続する自然現象を表す」とされる。（日文研2009：82）
⑸　以下，特に断りがない限り，例文の右側に出典が明記されていない例はすべて筆者による作例である。

わけではない。

（7’）　太郎がめまい｛で／??に｝倒れた。

さらには，次の例文が示しているように，どちらの助詞が使われるかによって，文の解釈が異なる場合も存在する。

（9）　返事｛で／に｝困る。（村上（2010：99））
（10）　太郎は自分の運転｛で／に｝酔う。
（11）　A 社はパナマ文書の公開｛で／に｝おびえている。

（9）では，「に」が用いられた場合，「どのように返事をしてよいか」がわからず，それが「困る」の原因なのに対して，逆に「で」を使った場合，「相手によってなされた返答」が「困る」の原因となるという解釈の違いがみられる（cf. 村上（*Ibid.*））。（10）では，「で」の場合は，「自分が運転しているにも拘わらず，気分が悪くなった」というある種の譲歩の解釈が優勢になるのに対し，「に」が使われた場合は，「酔う」の解釈は「気分が悪くなる」とは全く反対の，「うっとりする」という自己陶酔の解釈になるのが普通である。また，どちらの助詞が用いられるかによって動詞「酔う」の解釈（より正確には，「自分の運転」と「酔う」の間の関係）が同じではないということが観察できる。最後に（11）では，助詞の違いによって，それによって標示される名詞句である「パナマ文書の公開」のステータスが異なる。「で」が使われた場合，「パナマ文書が公開されたこと」，という既に確定した出来事が「おびえる」という感情を引き起こしているという解釈になるのに対し，「に」が使われた場合は，「パナマ文書」はまだ「未公開」であり，それが公開されることが「おびえる」という感情の対象であるという解釈が勝る。

このように，「で」と「に」の交替可能性と制約は，多くの場合，文脈

的要素によって決定的な影響を受けることが確認できる。したがって，この問題は，一方では，助詞によって標示される名詞句の語彙的性質や名詞句の限定の仕方，他方では，述語動詞の語彙的性質やアスペクト，という，「で」と「に」が標示する名詞句と述語動詞のあいだに存在する多様で複雑な関係を明らかにすることによって説明されなければならないと思われる。

本稿は，「で」と「から」のそれぞれの仮説に基づき，このような複雑な分布[(6)]を見せる原因を表す2つの格助詞の交替可能性と制約の一部を明らかにする試みである。

2　「で」と「に」の仮説

2.1　先行研究

「原因」を表す「に」と「で」の比較については複数の研究が存在するが，それぞれの助詞の仮説を提示している宗田（1992）と菅井（2008）の研究に簡潔に言及する。

この問題についての最も詳細な記述を行っている宗田（1992）は，「で」を「述語との結びつきが弱く主従関係の従部分でいわば「外的に」原因を付加する」，それに対し「に」を「述語動詞と強く結びつく補語をマーク」すると特徴づけている（p. 83）。そのうえで，「で」を「外的原因」，「に」を「内的原因」としている。また，「原因」が，「原因」と「結果」という2つの事象から成り立つとすれば，「に」はそれをマークせず，「変化を示す述語動詞の変化に関与した対象をマークするもの」と呼ぶ方がより適切であるとする（p. 83）。

一方，菅井（2008）は，認知言語学のアプローチに基づいて，原因を標

(6)「で」と「に」の交替に何らかの意味的差異を認めようとする立場をとる研究に対して，島田（2014）のように，格助詞ニが，一部の用法において若年層に使用されなくなり，デやカラにとって代わられていく傾向を記述しようとする研究もある。本稿は，このような傾向を考慮に入れながらも，前者の立場をとる。

示する「で」,「に」,「から」の３つの助詞の相違点を分析しているが，ここでは本稿で取り上げる「で」と「に」の記述に限って取り上げる。菅井は「で」と「に」について，次のような包括的な仮説を提案している。「で」の仮説を,「前景的なガ格ないしヲ格成分と，背景的なデ格との意味関係が，動詞の語彙的な意味によって変質しない」（*ibid.*：４）とし，それは,「事象の最初から最後までデ格 NP はガ格 NP またはヲ格 NP との関係が均質的である」（*ibid.*：５）と言い換えられている。他方,「に」については「自動詞の主格または他動詞の対格がニ格成分に《一体化》」（*ibid.*：６）するとしている[7]。そして，Talmy（1985）を援用し,「で」と「に」が「原因」を表すのは，これらの助詞によって標示される NP から主体 NP への「エネルギー伝達」が認められる場合であるとする。cf.「？次郎が弾丸で倒れる」vs.「次郎が弾丸に倒れる」（*Ibid.*：７）;「運転手の不注意で事故が起きた」vs.「?? 運転手の不注意に事故が起きた」（*Ibid.*）

本稿で提示する仮説は宗田（1992）のそれに近いが，宗田のどちらかというと統語的な特徴付けに対し，本稿では,「で」と「に」によって標示される名詞と述語のあいだの意味的関係により注目しながら両者の違いを考察していく。

2.2　理論的基盤

まず，格助詞の機能についてごく簡単に本稿の仮説を述べておく。日文研（2009：４）は,「格助詞」を「名詞と述語とのあいだに成り立つ意味関係」を表す助詞と定義する。そして，格助詞が表す「意味関係」として,

---

(7)　宗田（1992：77-78）も，原因の「に」を特徴づけるために同じ「一体化」という概念を用いているが，同じ意味では用いていない。宗田の言う「一体化」は，(a) ニ格成分が動詞述語と結びつきが強いこと，(b) 述語動詞で表される結果状態がニ格でマークされる原因と結びついたまま維持されること（cf.「田中さんが病にふせている」），という，あくまでもニ格成分と述語動詞の間の関係が問題になっている。

「主体，対象，相手，場所，着点，起点，経過域，手段，起因・根拠，時」などを認めている。

それに対して本稿では，格助詞は，それによって標示される名詞（＝X）と述語（＝p）を関係づける機能を持つと考える。より正確に言えば，Xに何らかの特性を付与してpと関係づける機能を持つ語であるという仮説を立てる。すべての格助詞はこの機能を共通して持つが，Xにどのような特性が与えられるかによって異なると考える。つまり，それぞれの格助詞は，述語pに関係づけられるXのステータスがどのようなものであるかによって異なる。また，本稿では，それぞれの格助詞は，「主体」，「起因」といった，ア・プリオリに与えられた意味関係をマークするのではなく，特性付与されたXとpのあいだの関係づけによって，これらの意味を「構築」するという立場をとる[8]。以下，「で」と「に」の仮説を提出し，「原因」の意味が，それぞれの格助詞が行う関係づけの違いにより，２つの別々のやり方で構築されることを示す。

2.3 「で」の仮説

芦野・伊藤（2019）では，「で」の包括的仮説を次のように提案した。

「で」は，Xを，pの成立の「媒介」として規定する。

従って，「で」はXに「媒介」という特性を付与したうえで，pと関係づけるという機能をもつ格助詞である。XがpのXの成立の「媒介」であるとは，Xがpで表される事態の成立を可能にするような，事態の未成立―成立のあいだに介在する存在という意味である。また，「媒介」というタームは，それが述語pの構成要素ではないが，pで表される事態の成立

(8) 本稿は，このような「構築主義」（« constructivisme »）を標榜するA. Culioliの研究を中心に発展を続けている発話操作述定理論（Théorie des Opérations Prédicatives et Énonciatives, TOPE）を理論的基盤としている。

に関与するといういわば「間接的」特性を強調している。例えば,「台風で屋根が飛んだ」において, X＝「台風」はp＝「飛ぶ」の一部ではないが,「飛ぶ」の成立に関与していると言える。

「に」と同様「で」は，すぐれて多義的な格助詞であるが，Xがどのような意味でpの成立の媒介であるのかによって，つまり，媒介Xがpに対して持つ関係が様々に解釈されることによって，その多義性は説明されうると考える。芦野・伊藤（2019：108）では,「で」が「原因」を表す場合，媒介Xは「トリガー」であるとした。すなわち，この場合，媒介Xがpに関係づけられる，とは,「Xがpを結果・続きとして引き起こす」ということである。したがって，原因の「で」においては，トリガーXと結果pを区別して捉えると言える(9)。

2.4 「に」の仮説

「に」の仮説を次のように提案する。

> 「に」は，Xを，pを必然的に成立させるような，pの内部要素であると規定する(10)。

「に」は，Xに,「pの内部要素」という特性を与えたうえで，pと関係づけるという機能を持つ格助詞である。「で」が規定するXはpに対して「外的」であるのに対し,「に」が規定するXはpの「内部要素」として，pと不可分の関係を持つ。例えば,「本が水に濡れた」においては，X＝「水」は，p＝「濡れる」によって表される事態を必然的に成立させる要素であり，逆にXなしではpが成立しないような要素である。この例の

(9)　しかし，のちに見るように, Xの語彙的性質によって, XとpのXの区別には様々なタイプがある。

(10)　この「に」についての仮説は，原因の「に」に特化したローカルな仮説である。「に」についての体系的な研究は現在準備中である。

場合，X は p と，いわばトートロジー的な関係を結んでいると言える[11]。

このような性質から，「原因」の「に」においては，「原因」の「で」の場合と異なり，X と p はそれぞれ「原因」と「結果・続き」というようには区別できない。

以上をまとめると，「で」と「に」は共に「原因」を表すが，X と p の間の関係づけが全く異なると言える。「で」によって表される「原因」の意味は，媒介（トリガー）という特性を与えられた X が，p を結果・続きとして引き起こす，という関係づけを行うことから構築される。他方，「に」は「原因」の意味を，p の内部要素としての特性を付与された X が，p を「必然的」に成立させる，という関係づけを行うことから構築される。

3　「で」と「に」の特性

この節では，「で」と「に」のそれぞれの仮説に基づき，両者の制約と交替可能性について考察する。また，仮説から帰結される，それぞれの追加的特徴についても考察する。

3.1　1 命題的か，2 命題的か？

宗田（1992）は，以下のような，原因の「で」と「に」の統語的特徴の違いを明らかにしている。

・「に」は 1 命題であり，主体が同一で，複文化がしにくい。

（12）　この名作に感動した。（宗田1992：74）

（13）　*議長の欠席に会議が流れた。（*Ibid.*）

⑾ 『明鏡国語辞典』（第三版）は，「濡れる」の第一義を「物の表面に水などが（たっぷりと）つく。また，物に水がかかって中までしみ込む。」としている。したがって，この場合，X（雨）は p（濡れる）の語彙的意味の構成に必須の要素であり，統語的にも必須補語である。しかし，のちに見るように，X が p の語彙的意味の構成に必須でなくとも，p の成立に必須な場合もある。

（12）は，テ形を使って「この名作を見て感動した」と置き換えれば分かるように，「名作」を見た人と「感動した」人が同一であり，１命題の文であるとする。それに対して（13）は，テ形で置き換えると，「議長が欠席して，会議が流れた」となり，ニ格名詞が述語動詞の主体とは異なるため，１命題の文にならず，「に」は不適格であるとされる。

・「で」は主体が同一でなくともよく，（２命題とまでは言えなくとも）１命題以上の主従関係が認められ，複文的な（主従間の継起性があるとも言い換えられている）性格が強い。

（14）　ガンで死んだ。（*Ibid.*：68）

（15）　議長の欠席で会議が流れた。（*Ibid.*）

（14），（15）は，テ形を用いてそれぞれ「ガンにかかって死んだ」，「議長が欠席して，会議が流れた」と書き換えられるように，ニ格名詞と述語動詞の間の主体が同じでも異なってもよい。

・「で」格名詞は，モノ名詞ではなく，コト性を持つ事態名詞の性格を持つ。以下の例では，「カゼ」は「カゼをひいたコト」と解釈される。

（16）　カゼで休んだ。（*Ibid.*：84）

以上，宗田（1992）によって提示された「で」と「に」の統語的違いの一部を紹介した。

しかしながら，「で」が「１命題」的な文で用いられたり，逆に「に」が「２命題」的な文で用いられている例文も存在することが観察される。

（17）　a．太郎は癖で爪を噛んでしまう。

　　b．太郎は惰性でテレビを３時間も見てしまった。

（18）　a．［…］中学３年のとき，進路で迷った。（村上2010：99）

b．来週二次会があるのですが，そのときに着ていく服装で悩んでいます。（*Ibid.*）

実際，（17）においては，Ｘとｐが２つの別々の事象を表しているとは考えにくく，むしろ１つの事象を表しているように見える。芦野・伊藤（2019）では，これらの例において，Ｘは広い意味で，主体の「特性」と解釈でき，ｐはその特性Ｘの「発現」であると述べた。というのも，「癖」や「惰性」といった特性は，それ自体としては具体的な形を持たず，ｐを通して主体にそれが発現して初めて把握できるものであるからである。したがって，「台風で屋根が飛んだ」と同じ資格では，Ｘとｐは２つの事象とは捉えられない[12]。また，Ｘとｐのあいだに時間的継起性または順序を問うことはできない。

（18）においても，Ｘとｐはむしろ，１つの事象を構成しているように見える。村上（2010：99）は，Ｘにあたる「進路」と「服装」を，「進路に関すること」，「服装に関すること」と解釈し，「悩んでいる内容」を表すと分析している。言い換えれば，Ｘは「表象」であり，「出来事」ではないため，ここにおいても，Ｘとｐを２つの別々の事象として考えることは不自然である。

以上の観察から分かるように，「で」のＸは，「出来事」，「特性」，「内容（＝表象）」といった様々なステータスをもつことが可能であるが，Ｘとｐを２つの別々の事象としてみなせるのは，Ｘが「出来事」を表すときのみである。したがって，「で」に関しては「２命題的」という統語的特徴は必ずしも当てはまらないと言える。その代わり，「で」がＸを，その結果・続きであるｐを成立させるトリガーであると規定しているということは３つに共通していると言える。

⑿　注意しなければならないのは，Ｘとｐが区別されるか，という問題と，Ｘとｐが２つの別々の事象であるという問題は同じではない。「で」においてはＸとｐは常に区別されているが，常に２つの事象であるとは限らない。

逆に，「１命題的」とされている「に」が「２命題的」な文で現れるケースも存在する。

(19)　そよ風に船の帆が揺れている。
(20)　秋風に落ち葉が舞っていた。

宗田の分析に従えば，(19) では，「潮風が吹いて，帆がゆれている」，(20) では，「風が吹いて，落ち葉が舞っている」と言い換えられ，かつ，ニ格名詞が述語動詞の主体とは異なるため，その意味で複文的であると考えられる。だとすれば，同じく「２命題的」である (15)「*議長の欠席に会議が流れた」では「に」が不適格であり，これらの文では可能であるということをどのように説明すればいいのだろうか。

それは，これらの例文は，「に」の機能，つまり，X が p の内部要素として，必然的に p を成立させる，というメカニズムに適合しているからである。(19)-(20) においては，一つには，X のどちらかというと「継続的」特性と p の進行相のアスペクトが相俟って，p と X が併存 (concomitant) することを可能にしているからであり，もう一つには，X ＝「風」が，p の内部要素としての適性（p を必然的に引き起こすこと）を持ち合わせているからである。つまり，一方で，「風」と「揺れる」・「舞う」が同一時間内にあり，他方で，「風」は「揺れる」と「舞う」で表される事態の成立にとって必須の要素であると考えられるからである（「船の帆」や「落ち葉」は，通常はそれ自体では揺れたり舞ったりできず，「風」によって引き起こされる必要がある）[13]。それに対して (13) では，X＝「議長の欠席」と p＝「(会議が) 流れる」，の関係には，上記のいずれの条件も認められないため，「に」が不適格になると思われる。

---

(13)　これらの例文は「で」で置き換えることもできるが，その場合は X と p の間の併存性は消え，X の p に対する「外部性」（または「背景性」）がより強調されるようである。

これらの文脈的条件が整うことで初めて，(19) と (20) では「に」が使えると考えられる。これらの例文では，一見，統語的には主体が２つあるように見えながら，意味的には，実はＸとｐは併存的関係にあるのである。したがって，何らかの理由でＸとｐの併存性が解かれる場合，「に」に制約が生じることになる。

(21)　?? 突風に旗が揺れている。
(22)　*強風に屋根が飛んだ。

(21) では，Ｘ＝「突風」は，瞬間的な現象であり，そのこととｐの進行相が矛盾する。(22) では，ｐが完了相であり，Ｘとはもはや併存していないため「に」は使えない。このような例の場合，「原因」を表すとされる「に」は，いわば「原因」と「結果」が区別できないような，または，「原因」と「結果」が一種の「相互依存性」とでも呼べるような関係を表すような事態に対して用いられるようである[14]。

したがって，「に」についても，１命題的であるか否か，主体が同一か否か，というよりも，意味的観点からみたＸとｐの併存関係，または時間的同時性が文脈的に与えられれば使用が可能であると言える。

3.2 「に」と必然性

3.2.1 「必須の補語」

宗田 (1992) は，「に」によってマークされる補語は，「一文を構成する要素として述語動詞が必須に要求するもの」(p. 73) であるとしている。ここで問題になるのは，「述語動詞が必須に要求する」ということは何を意味しているのかである。

---

[14] このことは，「地震におびえる」のような，感情動詞の補語をマークする「に」において，「地震」が「おびえる」の「対象」であると同時に，「おびえる」という感情の「原因」と分析できることと無関係ではないと思われる。

(23)　頬が涙に濡れている。(*Ibid.*：73)
(24)　この名作に感動した。(*Ibid.*)

これらの例においては，「涙」と「名作」はそれぞれ，動詞「濡れる」と「感動する」が要求するいわゆる「必須補語」と考えられる。つまり，「涙」は「濡れる」の意味が内包する「水」的要素であり，「名作」は，「感動する」の「対象」である。しかし，次のような例では，「に」格でマークされた名詞が，このような意味で，述語動詞の必須補語であるとは考えにくい。

(25)　病に倒れる。
(26)　鳥の声に目覚める。

通常，「倒れる」という動詞の意味構造の中ではX＝「病」は必須補語とはみなされるとは考えにくく（cf.「太郎が倒れたらしい」でも立派に文は成り立つ），同じく，「目覚める」という動詞についても，「鳥の声」がその必須補語であるとは言いにくいであろう。

このように，原因を表す「に」において，Xは，動詞の意味構造の観点から必須の場合もあるし（「必須補語」），そうでない場合もあることがわかる。

本稿の仮説では，「に」はXにpの「内部要素」という特性を与え，それはpを必然的に成立させるような要素としている。その意味で，Xはpが表す事態の成立にとって「必須」(nécessaire）なのであり，Xは文脈的・意味的にそのような適性を備えている必要があるのである。したがって，Xに，pを成立させるような適性が認められない場合，「に」に制約がかかることになる。

(27)　ノンアルコール　{で／*に}　酔うって本当？空酔いについて調べ

てみました。〈https://yosiaa.com/wp/〉

3.2.2　X と p のあいだの対称性

宗田（1992）は，「に」を，「述語動詞が示す変化結果と原因を表す名詞句が結びついたまま切り離せない」（p. 78）という「一体化」という概念で特徴づけ，それがない場合は「に」は不適格として次の興味深い対比を挙げている。

（28）　木が風　{*に／で}　倒れた。（*Ibid.*：78）
（29）　田中さんが貧血　{*に／で}　倒れた。（*Ibid.*）
（30）　田中さんが病　{に／で}　倒れた。（*Ibid.*）

宗田（*Ibid.*）は（28）について，「倒れた」は「身をくずして倒れ込んだという田中さんの瞬時の身体の動きについて述べている」とし，「変化の結果が原因と切り離されている」ため，「に」に制約があるとしている。それに対し，（29）については，「倒れた」は「病にかかって病に取りつかれたという「巻き込まれた」状態を表現することが主旨であるからによって，「一体化」をマークする「に」でマークできる」としている。これはつまり，「倒れる」の意味を「床に就く」という意味で解釈して，そこから「倒れる」の結果がまだ継続している（cf.「変化の原因と結果の結びつき」）ということを主張しているように思われる。これは正しい分析であると思われる。これらの例は，次のような（ある意味例外的な）例と関連付けて考察すると興味深いと思われる。

（31）　ベーカー街を商用で訪れていた男が，激しいめまいに倒れる。
〈http://blog.livedoor.jp/makemyday2015/archives/71352161.html〉
（32）　ニューヨークに住む売れない音楽家のゴードンは，子供番組に音楽を書き下ろして生活費を稼ぐ日々を送っている。（…）そんな中，

突然の頭痛とめまいに倒れる。検査の結果，脳手術を受けなければ命が危ないと宣告される。〈https://okepi.net/kangeki/1245〉

(33)　あまりの暑さに気を失う人が続出した。（白川（監修）2001：25）

(34)　販売員のあまりに熱心な勧誘に，つい契約書にサインをしてしまった。（*Ibid.*）

これらの例文に共通するのは，(31) では「激しい」，(32) では「突然の」，(33)，(34) では「あまりの／に」によって X が限定されていることである。これらの限定は，程度の高さや制御不可能性を表しており，その結果，X が必然的に p を成立させる条件を整えていると考えられる。例文 (31) と (32) の「倒れる」は，ここでも「病の床に臥せた状態に陥る」と解釈されると思われる。(cf. (32) の「に」の後文脈)

別の言い方をすれば，X にこのような限定がつくことによって，X と p のあいだに，ある種の「対称性」（シンメトリー）が成立すると言える。つまり，X が，p を必然的に成立させるほどの X，という解釈をもつようになると考えられるのである。この意味で，「に」は，p の成立に適合するような X を p に関係づけていると言える。

実際，次のような例文においては，X が重度の状態を表すと解釈される場合のみ「に」が自然であり，逆に X が p を引き起こすのに充分でないような場合は「に」に制約があることが観察される。

(35)　a．？田中さんが微熱に倒れた。

b．暴風雨の中，旅を続けていた二人だったが，太郎兵衛が高熱に倒れ，瀕死の状態になる。〈https://www.kinokuniya.co.jp/f/dsg-08-EK-0091374〉

(36)　a．*田中さんが貧血に倒れた。［＝ (29)］

b．［精神分析学者シャーンドル・フィレンツィについて］これらの冒険的実践がフロイトとの確執を生み，学界で孤立してい

った。慢性貧血に倒れ，1933年５月にブダペストで生涯を閉じた。〈https://books.rakuten.co.jp/rb/1208301/〉

（35a）で「に」が可能になるためには，Ｘが単なる「微熱」と解釈されるだけでは不十分であり（「微熱」にはその適性がない），「高熱」である必要がある。同じく，（35b）でも，Ｘが「慢性貧血」のような深刻な症状ならば「に」は可能である[15]。また，（35b）と（36b）では，両方とも，「に」で表された原因は，いわば決定的で，命に関わる原因としてみなされていることが，後文脈により強調されている。

以上の分析が正しいとすれば，このような例文において「に」が可能になるためには，宗田（1992：77）が述べる「述語動詞が示す変化結果と原因を表す名詞句が結びついたまま切り離せない」ことに加え，Ｘの語彙的特性が，ｐの成立にとってふさわしい・ｐを成立させるのに見合っているかどうかという，ＸとｐのＸの間のシシンメトリックな関係性も重要な要因になると言えよう。

3.3 「で」と「偶有性」

ここでは，「で」が規定するＸの特性についてより詳しく考察する。

「に」がＸに，ｐの「内部要素」という特性を与え，それはｐを必然的に成立させるような要素であるのだとすれば，「で」においては，Ｘはｐの成立の媒介というステータスしか持たない。Ｘにとって重要なのは，それを介して，ｐが成立することのみであり，「に」のように，Ｘがｐに対してふさわしい資質を備えているかに関しては全く中立的である。つまり，Ｘはトリガーとして，結果であるｐを引き起こす限りにおいては，どの

---

⑮　もちろん，文脈によって「高い程度」が回収できれば「に」が可能になると思われる。また，名詞によっては，Ｘに何も限定がなくとも，その語彙的性質そのものにより「高い程度」を表し，ＸとｐのＸの間にシンメトリックな関係を構築できるものもある。cf.｛飢餓／凶弾／爆弾テロ／病｝に倒れる。

ようなものでもよいということになる。その意味で，「で」においては，Xはpにとって「偶有的」（contingent）であると言える[16]。したがって，次のような例では「で」しか使えない。

(37)　a．水道管の破裂　{で／*に}　道路が濡れている。
　　b．上層階のクーラー排水　{で／*に}　道路が濡れている。
　　c．春先の雪解け　{で／*に}　道路が濡れている。

これらの例において，Xは「水道管の破裂」，「上層階のクーラー排水」，「春先の雪解け」という「出来事」として解釈される。したがって，出来事としてのXそれ自体は，p「濡れる」によって表される事態を必然的に成立させるような「水」やその類と解釈できない（例えば，「水道管の破裂」はそれ自体は「水」ではない）ため，「に」は不適格であるという説明が可能である。

ただし，次のように明示的に，Xとして「水」を導入すれば，「に」は完全に自然とは言えないまでも，容認度は上がるように思われる。

(37')　水道管の破裂で噴き出した水　{で／（？）に}　道路が濡れている。

これに対して「で」は，p＝「濡れている」が，結果として成立しさえすれば，Xについての制限が「に」よりもはるかに少ないのである。このXの偶有的性質は，Xが必ずpを引き起こすという，Xとpの間のいわば「直接的」な関係は必要とせず，Xとpの間の関係が「間接的」であってもXを「で」でマークできることを意味する。

その結果，「で」によって，Xとpの間の関係は様々な「推論」によって補われることが可能になる。例えば，(37a) においては，「水道管の破

(16)　これは，宗田（1992：69）の「「で格」名詞と述語動詞との結びつきが弱い」という主張に近い。

裂」と「道路が濡れている」の間にはア・プリオリには何らの必然性も直接性もない。「で」によって，原因（トリガー）と結果の間に，「水道管から水が噴き出した」という１つの推論の段階が導入されるのである。その意味で，Ｘは結果であるｐが成立するための可能性の１つに過ぎないのである。

このように，「に」と「で」は，Ｘにそれぞれ「必然性」と「偶有性」という，ある意味で正反対のステータスを与えているのである。

3.4 「で」と「充足性」

最後に，「で」の仮説から帰結するもう一つの特性をごく短く考察する。

(38)　ちょっとの物音でどきっとする。（山田2003：21）
(39)　そんなことで驚くな！
(40)　花子はたったビール一杯で酔ってしまう。

これらの例文における「で」は，原因をあらわしているが，追加的な意味効果を持っていると考えられる。

(38)-(40) では，Ｘに当たる名詞句が，「ちょっとの」，「そんな」，「たった一杯」のような，ア・プリオリには結果であるｐを成立させることができないような限定をされている。にも拘わらず，ｐが成立するのに充分であることが「で」で表されており，「譲歩的な」（～でさえ・～にも拘わらず）解釈が生ずると思われる。

これらの文において重要なのは，トリガーとしてのＸが，結果であるｐを成立させるのに充分な（＝成立させるのに足る）特性を持つものとして捉えられていることであると思われる。つまり，結果としてのｐが，ある種の「合目的性」を伴っており，Ｘはそれを達成するようなトリガーなのである[17]。

以上のように，「で」はＸを，ｐが成立するのに足りる媒介として規定

する特性も持っていることがわかる。その意味でも，「に」によってXがpを必然的に成立させるようなpの内部要素と規定することとは，全く異なるメカニズムを持つと言える。

結語

本稿では，格助詞「で」と「に」について，それぞれが異なった方法で，「原因」の意味を構築するメカニズムを明らかにしようとした。それぞれの格助詞は，格標示されるタームXに，特定のステータスを付与したうえで，pと関係づける機能を持つ，という仮説から出発し，「で」はXをpを成立させる偶有的・充足的「媒介」と規定するのに対し，「に」はXをpを必然的に成立させる「pの内部要素」と規定するとした。このXのステータスの2つの違いから，先行研究を補完しつつ，「で」と「に」の交替可能性と制約の説明を試みた。本稿で提示した「で」と「に」が「原因」を構築するメカニズムは，今後，同じく「原因」を表すとされる「から」，「より」などと対照することで，より精緻化される必要がある。

---

(17) ただし，「で」の充足性という意味効果は，「で」が「原因」を表す場合だけでなく，「道具」と解釈される場合にも生ずるようである。

(i) 初弾で倒れなかった猪がこちらに向かって捲って来るという局面もありますから，咄嗟の次弾発射が要求されることも再々です。〈https://ameblo.jp/iulius-predator/entry-11357827642.html〉

(ii) FBIが伝えたところによると二人は同じ寝室で息絶えており，フレッドはハチの巣状態。ケイトは一発の弾丸で倒れたそうだ。〈https://eiga-board.com/posts/3035?p=2〉

これらの例において，Xが「道具」と解釈されるのは，pが「非意志的」であるにも拘わらず，銃を撃つ主体の存在が文脈上認められるからであろう。また，「100円で足りる」，「これでいい」のような例文にも「充足性」が認められる。

参考文献

Culioli, Antoine (1990; 1999; 1999; 2018): *Pour une linguistique de l'énonciation,* tomes 1–4. Ophrys / Lambert-Lucas.

Dhorne, France (1984): « Différenciation, identification. La particule –NI– en japonais », *Recherches en linguistique japonaise*, Collection ERA, Université Paris 7, p. 71–105.

Shimamori, Reiko (1991): *Des particules japonaises*, Taishuukan.

Terada, Akira (2001): « La particule *ni* en japonais », *Faits de langues*, 17, p. 253–261.

芦野文武・伊藤達也（2019）:「現代日本語における格助詞「で」の多義性の理解に向けて」,『言語・文化・コミュニケーション』, 51号, 慶應義塾大学日吉紀要, p. 105–124.

芦野文武・伊藤達也（2020）:「現代日本語における格助詞「で」と「から」の比較—本質的機能の仮説と制約の説明—」,『藝文研究』, 118号, 慶應義塾大学藝文学会, p. 164–180.

島田泰子（2014）:「現代日本語におけるニ格表現の衰微と交替」,『二松学舎大学論集』(57), p. 45–65.

白川博之（監修）（2001）:『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』, スリーエーネットワーク.

菅井三実（1997）:「格助詞「で」の意味特性に関する一考察」,『名古屋大学文学部研究論集 文学 43』, p. 23–40.

菅井三実（2000）:「格助詞「に」の意味特性に関する覚書」,『兵庫教育大学研究紀要 第 2 分冊, 言語系教育・社会系教育・芸術系教育』, 20, p. 13–24.

菅井三実（2001）:「現代日本語の「ニ格」に関する補考」,『兵庫教育大学研究紀要 第 2 分冊, 言語系教育, 社会系教育, 芸術系教育』, 21, p. 13–23.

菅井三実（2007）:「現代日本語における奪格の意味記述」,『兵庫教育大学研究紀要』, 30号, 兵庫教育大学, p. 49–58.

菅井三実（2008）:「現代日本語の格体系から見た原因 NP の格標示について」,『言語表現研究』, 24号, 兵庫教育大学言語表現学会, p. 1–11.

宗田安巳（1992）:「原因・理由の「で」と「に」の格らしさについて」,『日本語・日本文化』, 18号, 大阪大学日本語日本文化教育センター, p. 67–86.

寺村秀夫（1982）:『日本語のシンタクスと意味 I』, くろしお出版.

日本語記述文法研究会（編）（2009）:『現代日本語文法 2　第 3 部　格と構文』, くろしお出版. (「日文研」と略記)

村上佳恵（2010）:「感情動詞の補語についての一考察—「ニ」と「デ」について—」,『學習院大學國語國文學會誌』, 学習院大学, 53号, p. 110–95.

山田敏弘（2003）:「起因を表す格助詞「に」,「で」,「から」」,『岐阜大学国語国文学』, 30号, 岐阜大学教育学部, p. 13–23.